

メタ言語的使用と会話的推意
Metalinguistic Use and Conversational Implicature

小田拓弥

Abstract

Linguistic expressions are sometimes used (rather than explicitly mentioned) to communicate about the expressions themselves. Some philosophers think such phenomena as Gricean conversational implicatures. Grice's explanation of conversational implicatures depends on inference based on what is said, roughly speaking, literal contents of utterances. This fact requires listeners to know the literal meanings of all expressions constructing sentences speakers use. However, some metalinguistic uses include using expressions whose meanings listeners do not know. I argue that there are indirect communications like conversational implicatures in which listeners do not know some of meanings of words used by speakers. Some of metalinguistic uses fall into such a category.

(1) 研究テーマ

本稿では、言語表現のメタ言語的使用は意味論や語用論においてどのように説明されるべきか、特に、Grice に由来する会話的推意として説明されるべきなのか、という問題を扱う。

(2) 研究の背景・先行研究

明示的に引用や言及がなされる場合とは別に、ある言語表現が使用されているにもかかわらず、その表現自体に関する伝達が行われているようなケースが存在する、と指摘されることがある。こうした指摘は、特定の表現や構文に関するものであることもあれば、言語表現一般の用法についてのものでもあることもある。また、そうしたメタ言語的な使用が行われていることが直観的にはっきりしている場合もあれば、何事かを説明するための理論的仮説としてそうした説明がされる場合もある。

例えば、「背が高い」のような段階的述語のメタ言語的使用が挙げられる

(Barker 2002)。

(1) A: この業界では、「背が高い」という表現をどれぐらいの背丈の人に対して用いますか。

B: 例えば、あそこに見える太郎は背が高いです。

というやりとりでは、Bは「背が高い」という表現を使用しており、明示的な言及や引用を行ってはいない。しかし、「背が高い」という表現に関するAの質問に対する適切な応答になっているということから、Bは「背が高い」という表現についての伝達をしていると考えられる。

ほかにも、メタ言語的否定 (metalinguistic negation) をめぐる議論 (Carston 2002, Geurts 1998, Horn 2001)、総称文には「定義的」な用法があるという指摘 (Krifka 2013)、信念報告文の発話には信念主体が受け入れるであろう文の提示という側面があるという指摘 (Berg 1988, McKay 1988) などがある。

近年では、メタ言語的使用を介して、ある表現がどのような意味で用いられるべきかについての規範的な論争が非明示的になされるケースが、David Plunkett と Tim Sundell によってメタ言語的交渉 (metalinguistic negotiation) と名付けられている (Plunkett 2015, Plunkett & Sundell 2013, 2019, Sundell 2009)。

(2) C: 「背が高い」という表現をどれぐらいの背丈の人に対して使うべきですか。

D: 例えば、太郎は背が高いです。

E: いや、太郎は背が高くないです。

ここで、DとEのやりとりは、「背が高い」という表現をどれぐらいの基準で用いるべきかに関する論争を、「背が高い」を使用する形で行っているものと考えられる。メタ言語的交渉は、哲学的論争の解釈や倫理的述語、美的述語の意味論などとの関連で注目されている。

こうしたメタ言語的使用は、意味論や語用論の上でどのように説明されるべきであろうか。

文の意味を「文脈を変える力」とする発想にもとづいた動的意味論によるアプローチによって、段階的述語 (Barker 2002, Khoo 2020)、総称文 (Krifka 2013) のメタ言語的使用を扱う立場が提示されている。

また、語用論的なアプローチとして、信念報告文のメタ言語的側面 (Berg 1988) やメタ言語的交渉における規範的なメタ言語的使用 (Belleri 2017, Plunkett & Sundell 2019, Sundell 2009) を会話的推意 (conversational implicature) として説明する立場、表意の概念にもとづいてメタ言語的否定の一部を説明する立場が提示されている。表意については後述する。

会話的推意は、Paul Grice に由来する概念であり、使用されている文の字義通りの意味には属さないような間接的な伝達をとらえたものである (Grice 1989)。

(3) F: 太郎は哲学者として優秀ですか。

G: 彼はゼミへの出席率が高く、字がきれいです。

というやりとりでは、G が直接述べているのは、太郎はゼミへの出席率が高く字がきれいだということだけであるが、G は太郎が哲学者として優秀ではないということの間接的に伝達していると考えられる。このような会話的推意は、話し手が協調の原理や会話の格率と呼ばれる会話の規則にしたがっているという想定にもとづいた推論によって導出されるものとして説明される。会話の格率としては、「偽だと思ふことを言ってはならない」や「要求に見合う情報を与えなさい」などがある。

Grice においては、言語表現の字義通りの慣習的な意味と、多義性の除去と指標的表現への指示対象付与という最低限の文脈依存的処理とにもとづいた内容が、発話の真理条件的内容と考えられており、そうした内容は言われたこと (what is said) と呼ばれる。(3) の例では、太郎はゼミへの出席率が高く字がきれいだという内容が言われたことである。Grice においては、言語表現の意味の知識による言われたことの特定期にもとづいた推論によって導出される内容として推意が説明される。言われたことのレベルで格率にしたがっているために話し手が信じていなければならない事柄の推論によって説明されるケースもあれば、言われたことのレベルだけでは格率に反しており、推意のレベルで格率にしたがっているものとして説明されるケースもある。例えば、(3) のような例は、言われたことのレベルでは「要求に見合う情報を与えなさい」という格率に反するが推意のレベルではその格率にしたがっているような例として理解できる。

規範的なメタ言語的使用を会話的推意として説明する際には、例えば、言われたことの伝達において話し手は言語表現と概念との適切だと思うペアリングのもとで言語表現を使用しているという想定からの推論による説明が提示されている (Plunkett & Sundell 2019)。

(3) 筆者の主張

Grice が想定する会話的推意では、推意の導出において、言われたことの特定が前提とされている。しかし、メタ言語的使用の中には、聞き手が意味を知らない表現が話し手によって使用されており、聞き手が意味の知識にもとづいて言われたことを特定することができないような例があるように思われる。

(4) H: 「猫」という単語はどういう意味ですか。

I: 田中さんの家には 5 匹の猫がいます。

ここで、H は日本語初学者、I は日本語教師であるとする。また、H は「家」や「5 匹」などの意味を知っており、「田中さん」の家にもどのような動物がいるかについても知っているとする。(また、H がこれらを知っていることを I も知っている、等々も成り立っているとする。) このとき、I の伝達は、「猫」を使用することによって「猫」の意味について H に教えるようなものになっていると考えられる。また、

(5) J: この瓶のラベルには何と書いておけばいいですか。

K: その瓶にはエチルベンゼンが入っています。

というやりとりにおいて、J は「エチルベンゼン」という表現を聞いたことがなく、そのことを K も知っている、等々のことが成り立っているとする。それでも、K の発話は、瓶のラベルに「エチルベンゼン」と書いておけばいいということを伝達するものと考えられる。

これらの例では、メタ言語的使用において、話し手の用いる表現の意味を聞き手が知らず、そのことが話し手の想定にも含まれており、まず言われたことを特定するような推論にもとづいた説明はできないように見える。

しかし、ここで提案したいのは、聞き手が言葉の意味を知らないような間接的伝達の例はメタ言語的なもの以外にも見られ、Grice の会話的推意をより拡張したカテゴリーの中に位置付けることができるのではないか、という

ことである。

例えば、以下のやりとりで、Mは「勘解由小路」という名前を聞いたことがなく、Lもそのことを知っている、等々のことが成り立っているとす。

(6) L: 飲み物を用意しておく必要がありますか。

M: 今日は午後から勘解由小路さんが来ます。

それでも、Mの伝達はLの質問に対する肯定的な答えの伝達でありうるように思われる。また

(7) N: Kantは超越論的観念論者です。

O: すみません。「超越論的観念論者」という言葉の意味が私にはわからないので、易しく言い換えていただけませんか。

N: Kantは超越論的観念論者です。

というやりとりで、Nの二つ目の発話は、NはOに理解させる気がないということの伝達でありうる。(ほかにも、Nには「超越論的観念論者」を易しく言い換えることができないということの伝達なども考えられるが、その場合、この例もメタ言語的な伝達になるだろう。)

こうした例は、意味の知識にもとづいた言われたことの特定による会話的推意ではないものの、会話的推意に類似した間接的な伝達があるということを示唆している。先に挙げた「猫」や「エチルベンゼン」のような例も、言われたことにもとづくのではないようなメタ言語的な間接的伝達として位置付けることができるのではないかと思われる。Griceにおいて、会話的推意を含む推意という概念は、大雑把には発話によって示唆される事柄をとらえた概念として考えられている。言われたことの特定にもとづかない間接的伝達も推意の一種と考えることができるだろう。

そして、聞き手が言葉の意味を知らないような推意については、例えば、「聞き手が理解可能な言い方をせよ」という格率を想定し、一見したところはこの格率に反しているものの推意のレベルではこの格率にしたがっているようなものとして説明することが期待できる。ⁱそのような扱いができるとすれば、「猫」や「エチルベンゼン」の例のように聞き手が言葉の意味を知らないようなメタ言語的使用についても、それだけでは、会話的推意と類似の説明ができないということにはならないということになるだろう。

(4) 今後の展望

メタ言語的使用について分類をすることが必要である。例えば、(1) のような例についても、「背が高い」という表現に関する基準についての伝達と、「背が高い」や ‘tall’ のような特定の表現に関するものではないような、背の高さの基準に関する伝達とを区別することができると思われる。こうした区別をするにあたって、例えば引用の多義性に関する議論との類比が役に立つかもしれない。ii

メタ言語的使用の一部を会話的推意として説明しようとする時の問題として、会話的推意が持つとされる性質を持たないのではないかという問題がある。会話的推意が持つとされる性質として取り消し可能性がある。これは

(8) P: 太郎は哲学者として優秀ですか。

Q: 彼はゼミへの出席率が高く、字がきれいです。哲学者としても優秀ですよ。

のように、生じるであろう推意を明示的に否定することができることを意味する。だが、メタ言語的交渉の場合のような規範的なメタ言語的使用の場合、

(9) R: 「背が高い」という表現をどれぐらいの背丈の人に対して使うべきですか。

S: 例えば、太郎は背が高いです。しかし、「背が高い」という表現は太郎に当てはまるような基準で用いられるべきではないです。

の S のような発話は不適切であり、取り消し可能でないように思われる。この問題に対処する仕方としては、こうした例は会話的推意ではないと考えるほか、会話的推意の中には取り消し可能でないものも存在するのだと主張する、取り消し可能性という条件を明確化することで実は取り消し可能性は成り立っているのだと主張するなどの道が考えられる。最後の道を取る際に次のような例の考慮が役に立つかもしれない。

(10) T: 「背が高い」という表現をどれぐらいの背丈の人に対して使うべきですか。

U: 例えば、太郎は背が高いです。しかし、「背が高い」という表現は太郎に当てはまるような基準で用いられるべきではないです。けれども、実際には太郎に当てはまるような基準で用いられて

います。

このような例では(9)より不自然さが減るように思われる。というのも、「けれども、」以降の文があることで、一つ目の文の発話は実際に用いられているような基準にしたがったものとして理解可能であり、この場合、「背が高い」の基準として実際に用いられていると話し手が考えているものと、用いられるべき基準であると話し手が考えているものとの間にギャップがあるようなケースとして理解可能であるからである。(9)と(10)の比較は、生じるであろう推意を否定する文の発話に続けてさらに発話をつなげるか、つなげるとすればどのような文を発話するかに応じて、適切さの判断が変わることがあることを示唆する。そうした場合に取り消し可能性が成り立っているかどうかをはっきりさせるには、取り消し可能性とはどのような条件であるのかをより明確にする必要がある。

Grice に沿った会話的推意による説明とは別の道として、Grice の後継的な論者の枠組みにしたがった語用論的な説明が考えられる。本稿では、言われたこと概念を前提したり、会話的推意に関する格率にもとづいた説明に訴えたりする点で、Grice に沿った形での語用論的な説明の可能性について述べてきた。しかし、Grice 以後の論者の間では、これらの枠組みは必ずしも維持されていない。例えば、関連性理論 (relevance theory) の枠組みでは、人間の認知は関連性を最大化する性格を持つといった原理にもとづき、Grice が会話的推意として扱ったような伝達の例も説明されている (Sperber & Wilson 1995)。Grice の言われたことに相当する関連性理論の概念として、表意 (explicature) の概念があるが、これは、単に表現の字義通りの意味と最低限の文脈依存的処理のみにもとづいたものではなく、より豊かな文脈依存的処理にもとづいたものである。Grice の想定よりもより豊かな処理として、例えば「猫」の意味がわからなければ、その部分を「『猫』と呼ばれているもの」のようにメタ言語的な仕方で埋め合わせることで得られる命題を考えることができる。こうした立場は、メタ言語的使用を表意として説明する可能性や、聞き手が言葉の意味を知らない例も含む推意の一部を、メタ言語的な表意に伴う推意として説明する可能性をもたらすことが期待できる。ⁱⁱⁱ

ⁱ Grice は、聞き手に言われたことを理解させる気が話し手にならないような場合は、話し手は協調の原理にしたがっていないと考えているように読める記述をしている (Grice 1989, p.36, 邦訳 p.53)。しかし、一見したところ格率にしたがっていないように見えるものの推意のレベルで格率にしたがっているような例として理解できないのはなぜなのか、はっきりしない。

ⁱⁱ 引用の多義性については例えば Cappelen & Lepore (2007) を参照。

iii メタ言語的な文脈依存的処理があるとする立場として Carston (2002)、関連性理論にもとづいているわけではないが類似の立場をとるものとして Geurts (1998) がある。

(5) 参考文献

- Barker, C. 2002. “The Dynamics of Vagueness”, *Linguistics and Philosophy* 25: 1-36.
- Belleri, D. 2017. “Verbalism and Metalinguistic Negotiation in Ontological Disputes”, *Philosophical Studies* 174: 2211-2226.
- Berg, J. 1988. “The Pragmatics of Substitutivity”, *Linguistics and Philosophy* 11: 355-370.
- Cappelen, H. and Lepore, E. 2007. *Language Turned on Itself*, Oxford: Oxford University Press.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Oxford: Blackwell. (『思考と発話—明示的伝達の語用論』、内田聖二・西山佑司・武内道子・山崎英一・松井智子訳、研究社、2008年)
- Geurts, B. 1998. “The Mechanisms of Denial”, *Language* 74: 274-307.
- Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way of Words*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (『論理と会話』、清塚邦彦訳、勁草書房、1998年)
- Horn, L. R. 2001. *A Natural History of Negation*, Stanford, Calif.: CLSI Publications. (『否定の博物誌』、濱本秀樹・吉村あき子・加藤泰彦訳、ひつじ書房、2018年)
- Khoo, J. 2020. “Quasi Indexicals”, *Philosophy and Phenomenological Research* 100: 26-53.
- Krifka, M. 2013. “Definitional Generics”, in Mari, A, Beyssade, C. & Del Prete F. (eds.), *Genericity*, Oxford: Oxford University Press.
- McKay, T. 1981. “On Proper Names in Belief Ascriptions”, *Philosophical Studies* 39: 287-303.
- Plunkett, D. 2015. “Which Concepts Should We Use?: Metalinguistic Negotiations and the Methodology of Philosophy”, *Inquiry* 58: 828-874.
- Plunkett, D. & Sundell, T. 2013. “Disagreement and the Semantics of Normative and Evaluative Terms”, *Philosopher’s Imprint* 13: 1-37.
- Plunkett, D. & Sundell, T. 2019. “Metalinguistic Negotiation and Speaker Error”, *Inquiry*.
- Sperber, D. & Wilson, D. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*,

Cambridge, Mass.: Blackwell. (『関連性理論—伝達と認知』、内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子訳、研究社出版、1999年)

Sundell, T. 2009. *Conflict and Content*, Dissertation, The University of Michigan.

(無所属)